

日本家政学会  
被服構成学部会誌

第39号

平成30年3月

# 目 次

ごあいさつ	1
次期部会長挨拶	2
平成 29 年度 被服構成学協会 総会	3
一般社団法人日本家政学会 第 2 回家政学夏季セミナー	
プログラム	4
講演 1 「暑さ対策 / 障がいを持つアスリートとの協創について —2020 東京 op/pp へ向けての提案—」	5
講演 2 「アパレル三次元テクノロジーを活用したスポーツ衣料開発と シンクロする日常衣料開発」	6
基調講演「医療福祉用ロボティックウェア curara® の開発と展望」	7
見学 「信州大学繊維学部 Fii, 上田, 見学コース」	8
夏季セミナーに参加して	9
平成 29 年度 被服構成学協会 公開研究例会報告	10
講演 1 「教育現場の最新 ICT 環境の状況」	11
講演 2 「大学における被服教育での ICT の活用」	12
授業実践事例 「技術・家庭科での ICT を活用した布を用いたものづくり学習」	13
講演 3 「新学習指導要領から見る被服製作学習の動向と ICT の位置づけ」	14
若手研究者研究紹介	
「動作の分類からみた幼児期の着脱の特徴 — 3 歳児および 5 歳児の観察から—」	16
第 18 回 全国中学生創造ものづくり教育フェア 報告	18
関連学会短信	
日本繊維製品消費科学会	19
日本衣服学会	19
アジア地区家政学会 (ARAHE)	20
平成 29 年度 研究動向 (修士論文テーマ・科学研究費補助金研究課題)	21
会務報告	23
平成 28 年度 被服構成学協会 夏期セミナー収支報告	25
平成 28 年度 被服構成学協会 収支計算書	26
貸借対照表・監査報告書	27
平成 29 年度 被服構成学協会 収支予算書	28
お知らせ	29
平成 30 年度 夏期セミナーのご案内 (被服構成学協会創立 40 周年記念)	30

被服構成学部会 規約	31
被服構成学部会 申し合わせ	33
平成 28・29 年度役員 平成 30・31 年度役員	34
入会申込書および変更届, 退会届	35

## ごあいさつ

一般社団法人 日本家政学会被服構成学部会  
部会長 大塚 美智子（日本女子大学）

近年EC, ICT領域からのアパレルへの取り組みが加速化しています。ZOZOスーツの無償配布はその象徴的な出来事でした。被服構成学が発展していくためにはこうした領域とも共存していかなければならず、大きな課題を投げかけられています。

平成29年度の部会夏期セミナーは第2回夏季セミナーとして被服構成学部会、被服衛生学部会、色彩部会、服飾文化部会の4部会合同の形で9月3日、4日に信州大学長野キャンパスで実施されました。テーマは“生活の質的向上を目指す家政学の世界”-オリンピック・パラリンピックに向けて-で、スポーツメーカーの方、三次元パターンメイキングの専門家、着る生活動作支援ロボットcurara®（クララ）開発者、オリンピックの歴史研究者、プロジェクションマッピングの専門家、車椅子マラソンの研究者などさまざまな分野の専門家にご講演をいただきました。2日目の昼には4部会合同の情報交換会が行われ、その後信州大学繊維学部Fii見学コースと松代見学コースに分かれエクスカッションが行われました。

全国中学生創造ものづくり教育フェアは1月20日、21日に開催され、例年通り部会から支援を行いました。ご担当は川端博子先生から薩本弥生先生に交代いただきました。

例年3月に実施してきました研究例会は2月27日に日本女子大学で開催されました。児童・生徒・学生の技能レベルの低下は著しく、被服製作実習を担当する教員には負担が大きいものとなっており、本年度の例会では、学習者と教員を支援する方策の一つとしてICTの活用を取り上げ、教育現場での最新ICT環境の状況の講義に続けて、大学と中学校でのICT活用の事例から利用実態と効果について学び、最後に学習指導要領からみる製作学習の方向性に関する講義をいただき、教育方法の改善について考える機会となりました。

科学研究費補助金基盤研究Aの採択を受けて進められている人体計測は最終年度となりました。11月に人体計測結果の速報セミナーを実施しましたところ、大きな反響があり、本データのニーズの高さが伺われました。来年度の夏期セミナーはさらに踏み込んだ分析結果を報告する方向で検討されています。データ使用に関するルールも整備しましたので、今後は様々な形での成果報告に向けてご協力いただいた皆様と共にしっかり取り組んでまいりたいと思います。

最後になりますが、部会長として2年が経過しました。被服構成学は人間生活を基盤とし、快適な衣生活の創生に貢献できる分野ですので、本部会が部会員の活動拠点となりますよう務めたいと取り組んでまいりました。しかし部会員の減少傾向は続いており、部会員の資格要件を検討するなどの対応も検討してまいりました。この間、科研研究を推進することに忙殺されており、部会本来の取り組みが十分にできませんでしたこと申し訳なくお詫び申し上げます。運営委員の先生方をはじめ部会員の皆様方には本当にあたたかくご協力をいただきました。今後も部会員の皆様のご協力により被服構成学部会が益々発展しますことを祈念しております。

## 次期部会長挨拶

一般社団法人 日本家政学会被服構成学部会  
次期部会長 川端博子（埼玉大学）

平成も 30 年目に入り年月の過ぎ行く速さに驚くとともに、残り少なくなった平成時代のまとめをする年となりますが、皆さまはいかがな日々をお過ごしでしょうか。

歴代の被服構成学部会部会長におかれましては、行き届いたご配慮で、部会の活動を運営してこられました。

大塚部会長には、副部会長の時より科学研究費補助金基盤研究 A「アパレルの質と国際競争力向上の基盤となる日本人の人体計測データの構築と多角的分析」の研究費申請に向けてご尽力頂き、採択後には多くの部会員の協力のもと 2014 年～ 2016 年にかけて 3200 名もの人体計測をリードして下さいました。また、平成 29 年度には、家政学合同夏季セミナー「オリンピック・パラリンピックがつなぐユニバーサル衣料の未来」の実行委員長を務めて頂き、被服学領域の代表として本部会の発展に貢献頂きました。

この度、平成 30 年度からの部会長を仰せつかりまして、諸先輩が築いてこられた重みのある歴史を引き継ぐこととなり、身の引き締まる思いです。私は、もともと無力なうえに校長職の時期に重なり、不安な気持ちでいっぱいです。

昨今は、少子化と大学進学率の伸び悩みから大学の経営は厳しくなっており、退職教員の後任が採用されない、校務に追われて研究時間が取れない、研究費が削減されるなど、向かい風ばかりが吹いてきます。こうした状況下で部会員の減少も大きな問題となるわけですが、近い分野で研究・教育に取り組む者たちが支え協力しながら実績を作っていくことが求められています。私自身も本部会の活動で一緒した先生方と科学研究費で共同研究を続けてきましたので、この点でも感謝しています。この感謝の気持ちをお返しすることが私の役割と考えています。

新規 16 名の運営委員には若手の方々が多いのが特徴です。次期副部会長の文化学園大学の渡部句子先生、滋賀県立大学の森下あおい先生をはじめとする先生方には長く本部会でご尽力頂いております。ベテラン層にはこれまで以上に頼らせて頂くことになると思います。良き伝統は残し、若いメンバーの方々には新たな布石となって頂きたいと思います。

奇しくも平成 30 年度は、部会創立 40 周年に当たります。この節目において、人体計測の結果を社会に発信していくことがふさわしいと考えました。平成 30 年度の夏期セミナーは、創立 40 周年記念に位置付けて、文化学園大学の渡部句子先生に実行委員長と会場をお願いし、「ファッションビジネス戦略における身体サイズと衣料サイズの最新動向」の内容で開催する予定です。また、人体計測値を、部会員およびそれ以外の方々に利用頂くことで被服構成学の価値と部会の存在を広くアピールしていきます。

今後のその他の活動は、部会員の皆さまと話し合いながら決めていきたいと考えています。部会員の皆さまの忌憚のないご意見をお寄せいただきたいこと、積極的な部会への参加を期待しております。どうぞ 2 年間よろしくお願ひいたします。

## 平成 29 年度 被服構成学部会 総会

日時：平成 29 年 5 月 27 日（土）

場所：奈良女子大学

平成 29 年度被服構成学部会総会は、川端博子副部会長の司会により下記の通り進行した。

### 総会次第

- |                              |        |
|------------------------------|--------|
| 1. 開 会 の 辞                   | 川端 博子  |
| 2. 部 会 長 挨 拶                 | 大塚 美智子 |
| 3. 議 長 選 出                   | 亀井 佑子  |
| 4. 議 事                       |        |
| (1) 平成 28 年度事業報告             | 中村 邦子  |
| (2) 平成 28 年度会計報告             |        |
| ① 平成 28 年度収支決算報告             | 田中 早苗  |
| ② 平成 28 年度夏期セミナー会計報告         | 小山 京子  |
| ③ 平成 28 年度貸借対照表              | 田中 早苗  |
| (3) 平成 28 年度会計監査報告           | 鳴海 多恵子 |
| (4) 平成 29 年度事業計画（案）について      | 中村 邦子  |
| (5) 平成 29 年度家政学夏季セミナー（案）について | 川端 博子  |
| (6) 平成 29 年度予算（案）について        | 田中 早苗  |
| 5. 議 長 解 任                   |        |
| 6. 報 告 事 項                   |        |
| (1) 科研について                   |        |
| 7. 閉 会 の 辞                   | 川端 博子  |

上記の議事について審議し、承認された。

# 一般社団法人日本家政学会 第2回家政学夏季セミナー

## 生活の質的向上を目指す家政学の世界 —オリンピック・パラリンピックがつなぐユニバーサル衣料の未来—

日時：平成29年9月3日（日）～4日（月）

会場：信州大学教育学部

### プログラム

9月3日（日）		
12:30～	総合受付	
企画講演会	(E504 教室)	(N201 教室)
13:25～13:30	開会挨拶	開会挨拶
13:30 ～ 14:20	脊椎損傷者の体温調節と循環調節  奈良女子大学 芝崎 学氏	オリンピック日本代用選手団開会式用 ユニフォームの歴史 —『日の丸カラー』の誕生と継承に注目して— お茶の水女子大学他非常勤講師 安城寿子氏
14:20 ～ 15:10	暑さ対策/障がいを持つ アスリートとの協創について —2020 東京 op/pp へ向けての提案— ミズノ株式会社 研究開発部 技術戦略推進室 荻野 毅氏	近代女性スポーツファッションの変遷 —スポーツと装いの愉しみ—  梅花女子大学 好田由佳氏
15:10～15:25	休憩（コーヒープレイク）	
15:25 ～ 16:15	アパレル三次元テクノロジーを活用した スポーツ衣料開発とシンクロする日常衣料開発 株式会社ミズーラ代表取締役 佐々浩司氏	参加型の映像伝達表現としての プロジェクトマッピング NODE-LAB 主催、名古屋産業大学 河村陽介氏
部会企画 16:30～	被服衛生学部会 (E504) 被服材料学部会 (N104)	色彩・意匠学部会 (N102) 被服構成学部会 (N201) 服飾史・服飾美学部会 (N103)
9月4日（月）		
公開講演会 (E504)		
9:00～9:30	基調講演 1. ユニバーサル仕様の衣服設計を考える	京都女子大学 諸岡晴美氏
9:30～10:10	基調講演 2. 医療福祉用ロボディックウェア curara®の開発と展望	信州大学 橋本 稔氏
10:10～10:30	利用者主体のファッション支援 —誰もがおしゃれを楽しむために	金城学院大学 平林由果氏
10:30～10:50	カラーユニバーサルデザイン	日本女子大学 佐川 賢氏
10:50～11:20	パネルディスカッション	
11:40～13:00	全体情報交換会（フジヤ御本陣）	
エクスカージョン		
13:10～17:30	信州大学繊維学部 Fii, 上田, 見学コース	
13:10～16:30	真田十万石の城下町松代見学コース	



# 講演1 暑さ対策 / 障がいを持つアスリートとの協創について

## —2020 東京 op/pp へ向けての提案—

ミズノ株式会社 研究開発部 技術戦略推進室 荻野 毅氏

ミズノ株式会社研究開発部では、製品成立の理論構築と基幹技術及び素材の開発を行っている。2020 東京オリンピック、パラリンピックへ向けての開発課題は、暑さ対策と障がいをもつアスリート対策である。

ミズノ(株)では、前者としてペルチェ素子を用いたクーリングシステム、後者としてトップアスリート向け義足の開発を行っており、荻野氏から、これら二つの開発について紹介いただいた。

猛暑対策スポーツウェアの素材開発やウェア設計だけでは酷暑への対応が難しいことから、ペルチェ素子を内蔵した頸部冷却装置を考案した。装置のペルチェ素子接触部のマネキンの表面温度は約5℃低下し、単位m<sup>2</sup>当たり3～5%の冷却効果が推定できたことから、人間の活動効率や快適性の向上を図る可能性が報告された。今後も、一般ビジネスシーンを対象に、スポーツ品開発技術を活用した新領域商品やサービスの研究開発を続ける予定とのことであった。

また、障がいをもつトップアスリートと共に改良を積み重ねてきた最新仕様のスポーツ義足が紹介された。障がいをもつトップアスリートのパフォーマンスは、身体機能の回復や向上に加え、身体左右のバランスの協調が重要である。それらを考慮して、形状設計、軽量化設計、接触部の設計を経て、強度・耐久性試験を行い、加重変化と走り方いづれにも対応できる商品が開発された。特徴は、①日本人体型に合う、②大腿義足、下腿義足いづれの選手も対象、③スプリント走行に絞っているという3点であった。障がいをもつ学童から成人、高齢者が、健常者と共にスポーツを楽しむことができる社会環境づくりへの貢献を目指して、このような開発を前進させている。

東京オリンピック、パラリンピックへ向けて、トップアスリートが最善の状態プレーできる環境づくりのために、惜しみない努力を続けてくださっていると同時に、日常生活の中で、様々な状況にある人々がこれらの研究成果の恩恵にあずかれることにも感謝したい。講演時には、貴重なデータとともに商品サンプルなどを拝見でき、衣服の在り方を環境に合わせて柔軟に捉える必要性について考えることができた。(記録 鈴木明子)



講演中の荻野氏



スポーツ用義足サンプル



## 講演2 アパレル三次元テクノロジーを活用したスポーツ衣料開発と シンクロする日常衣料開発

株式会社ミズーラ 代表取締役 佐々 浩司氏

講師の佐々浩司氏は、株式会社ラーセンにデザイナーとして入社後、三次元人体計測を導入したオリジナル・パターン・オーダーメイドシステムであるシセ〈cice〉を開発、2008年に一部の事業を継承して独立し、株式会社ミズーラを起業、「科学」×「感性」をコンセプトにアパレル三次元テクノロジーを活用した衣料設計に従事されている。講演ではまず、これまでに手掛けられたランニング衣料を例に、競技者の競技時の姿勢が記録に関係していること、そして正しい姿勢を継続することが好成績に繋がるため、アパレル衣料設計者はその姿勢を理解することが必要であることを説明された。また人体の動きを把握するためには、個々の姿勢をつかさどる皮膚、筋肉、骨格の配置のみでなく、それらの関係性の理解も重要であると述べられた。そこでスポーツ衣料の一つとして、競技者の故障を防ぎ、競技時の負担を軽減する姿勢を保持できるランニングサポートウェアを開発することを目指したこと、その目的のために、三次元人体計測によって姿勢変化をとらえることになった経緯について解説された。さらに人体計測データから三次元モデリング画像を作成し、良いランニングフォーム時の筋肉の配置から、股関節や膝関節の動きを妨げないカッティングをデザインする工程を示された。また縫合においても、皮膚の伸長に生地伸びが追従できるような縫い目となる特殊縫製技術を用いたこと、そしてこれらの技術の結集によって、スポーツ衣料という、特殊な姿勢に対応する衣料開発を進めることができるという確信を得たことを説明された。

また氏は、NRF（全米小売業協会）の2017年年次大会のメッセージが「いよいよテクノロジーが実践の場に入る」であったことを示された。その上でこれからの展開として、再現性が進化したバーチャルリアリティ（VR）の技術を単にパターン検証という設計部門の支援に用いるのではなく、ファースト見本の製作の要不要、修正サンプル削減、展示会サンプルの要不要の判断にも活用すべきであることを説かれた。さらにVR技術をWebで用いれば、小売りを通さずメーカーから直接消費者に販売したり、消費者から直接注文を受けたりすることができるようになり、生産ロスの削減がコスト削減を可能にするといった技術がマーケットとシンクロする時代がきている



と言われた。現在、アパレル業界が力を入れているのはWeb販売であるが、求められているのはWeb管理者ではなく、デザイナーの意思を形に表し、消費者のニーズをとらえて三次元の技術を使いこなし、商品として具現化できる知識と技術が備わったクリエイターとしての人材であると、これからのアパレル人材育成に必要な示唆についても述べられた。

講演の最後に、氏は「個人的なこと」と前置きして、最近皮膚障害を発症し化学繊維の衣料を着ることができなくなったことについて話された。しかしそのことをきっかけに、改めて一人一人の人間の個性に適応した衣生活に対する情熱が沸いたとコメントされた。このコメントからも、生活に最も身近な衣料の開発にエネルギーを注ぐ佐々氏の熱い想いが伝わる講演であった。

（記録 村上かおり）

## 基調講演 医療福祉用ロボティックウェア curara®の開発と展望

信州大学 学術研究院 繊維学系 橋本 稔氏

超高齢化社会を迎える日本では、医療関係者の負担軽減とリハビリ訓練の効率化を目指したリハビリ支援ロボットの実用化が期待されており様々な研究・開発が進んでいる。そこで今回、医療福祉用ロボティックウェア curara® (クララ) の開発者である信州大学繊維学部の橋本稔氏にご講演頂いた。

医療福祉用ロボティックウェアには、人のできない作業を行う力増強型と高齢者や障害者の生活行動の力を補う力補助型の2種がある。これらのロボットは、装置が重い、装着者の自由な動きを妨げる、装着に時間がかかる、歩行の安定性が悪い、高額であるなど、多くの課題があり各企業が改善を目指して開発が進められている。そのような研究背景の中で橋本氏は、リハビリ訓練のように何度も繰り返し患者が使用して訓練を行うロボティックウェアにはユーザビリティ（使用者の使いやすさ）の視点による開発が重要である、という考えを基に10年程前から研究を重ねられてきた。

そこで辿り着いたのが、ロボットをパンツに埋め込むことで、日常的な「穿く」という動作にて簡易に装着できるという新しい発想である。従来型の衣服の上からロボットを装着する場合、補助者により機器を身体位置に合わせて毎回設定し装着してもらう必要があった。しかし本機器は、一度装着者へ位置合わせをすれば、その後の位置合わせが不要である。また、穿くという動作のため補助者を必要とせず装着者（患者）のみで装着することも可能となった。このように装着が非常に簡便になったと共に、装着時間も大幅に短縮された。また、高額であるモーターの数も減らすことができたため従来よりも安価で軽量となった。そして、内臓センサによりロボットの動きが生成されるため、人のリズムに合った動きが可能となった。また、今までは難しかった階段を上り下りもできるようになった。このように様々な改良がなされた本機器は、実証実験により、歩行時間の短縮、非対称になり易い脳卒中患者の対称性の向上、左右の揺れの改善などに有益であるという結果も得られており、脳卒中の回復過程や在宅医療などでのリハビリ訓練用ロボティックウェアとしての実用化が期待されている。

また、このロボティックウェアの名前である「curara® (クララ)」は、有名なアニメーションである「アルプスの少女ハイジ」の登場人物である車椅子の少女クララが由来となっている。橋本氏の研究のコンセプトである、「一人でも多くの方が車椅子では無く自分の足で歩くことを目指している」ということが伝わり易いネーミングである。



現在、改良品である4号機のご発表を控えていらっしゃる。更に、来年度ご発表予定の5号機にて大学発のベンチャー企業として製品化を、そして将来的には衣服素材自体が動作を補助するために伸縮するようなセンシング機能付きウェアの開発を目指しておられるとのこと。我々の生活を豊かにするロボティックウェアが普及する未来が近いと感じる貴重な講演内容であった。

(記録：角田千枝)

## 見学

## 信州大学繊維学部 Fii, 上田, 見学コース

### 歴史と自然と先端技術

東京家政大学 田中 早苗

セミナー最後のプログラムであるエクスカージョンは、情報交換会が行われたフジヤ御本陣で2つのコースに分かれて出発した。信州大学繊維学部 Fii 見学コースの参加者 27 名を乗せたチャーターバスは、一路上田キャンパスへと向かった。一行を出迎えて下さったのは、見学案内の取りまとめを担って下さった錦山氏と、大正から昭和初期にかけて建てられた警務員室や講堂などレトロな趣のある建物であった。誘導にしたがってキャンパスを進んで行くとモダンな研究棟ビルディングに囲まれ、さらに奥に進むと右手にコンテンポラリーな Fii のロゴマークが見えた。略称 Fii(フィー)の意味をあらためて確認してみると、Fiber Innovation Incubator, “オープンイノベーションにより新たなファイバー産業と地域産業を創出する産学官連携拠点”と記される。

見学者は Fii のロビーで2チームに分かれて、Fii 施設内と資料館、附属農場、そしてセミナーでご講演下さった橋本稔先生の研究室の4カ所を訪問させて頂いた。それぞれの訪問先で案内担当者が待機して下さり、2時間の見学を効率よく案内して下さった。まず、Fii 施設内を案内して下さったのは篠原氏、電磁波シールドルームや無響室、残響室など他では見られない設備の中に入室させていただき、見学者は声を発したり耳を澄ませたり、特殊な装置を体験した。1階のパイロットファクトリーには織機や編機が配備され、近年注目の炭素繊維や世界最高の引っ張り強度のザイロン繊維など興味深い新繊維を拝見することができた。

次に寺澤氏の案内による資料館は、明治44年の開校当時から佇む煉瓦造りの旧貯蔵庫(ちょけんこ)である。展示物は蚕に関する教材や標本、織物見本帳や輸出用生糸の商標帖など、中でも一際目を引いたのはシルキーな光沢を放つ円形に束ねた大きな生糸の棒(かせ)であった。見学者は上田蚕糸専門学校と日本の繊維産業の歴史が偲ばれる所蔵品の数々を時間の許す限り見入っていた。橋本先生の研究室では、人の動きに同調してアシストする医療福祉用ロボティックウェア curara®を研究員の方が下肢に装着して実際に室内を歩行する様子を見せて下さった。見学者の熱心な質問に橋本先生が直々にお応え下さり、ロボットの仕組みをより一層理解して実用化に向けて大いに期待を寄せた。最後に訪問したのは附属農場、先端技術を擁する研究棟の奥に緑豊かな桑畑が広がり、その対照性に感動した。実験農場で説明して下さったのは茅野氏。遺伝子の倍数性で大きく育った天蚕や桑の葉、適正な温湿度のもとで稚蚕飼育を行なう機械蚕室などを見せて下さった。晩夏の夕暮れに桑畑にて、“赤とんぼ”の歌を思い出しながら帰路へと向かった。この度の信州大学繊維学部の視察は、歴史と自然と先端技術研究の盛り沢山の内容であった。案内をご担当下さった関係諸氏に心からお礼を申し上げる。





# 夏季セミナーに参加して

## —衣服とテクノロジーの融合—

日本女子大学 武本 歩未

平成29年9月3日、4日に信州大学で開催された夏季セミナー「生活の質的向上を目指す家政学の世界—オリンピック・パラリンピックがつなぐユニバーサル衣料の未来—」に参加した。2020年の東京五輪に向け、スポーツアパレル分野での大会開催を見据えた動向を感じていたところのセミナーであったため、どの講演も大変興味深いものであった。

1日目の「アパレル三次元テクノロジーを活用したスポーツ衣料開発とシンクロする日常衣料開発」と題された講演では、ランニングウェアを例に挙げ、人体の姿勢や動作、動作時の皮膚、筋肉などの動きを捉え、それらを三次元的に衣服設計へ反映する開発工程が紹介された。さらに、それらの手法を日常着の設計に活用されており、車・自転車の乗車姿勢や、電車で吊革を持つ動作、ホームの階段の高さなど、日常化した様々な動作や環境に着目されている点は大変興味深いものであった。パターンの採取には動作中の姿勢を想定したある個人のものと思われる三次元人体形状データをボディとして使用していた。私は修士論文で、動的な可動域を配慮したボディ設計の基礎研究を行ったが、現在までにそのボディの実現には至っていない。講演を聴き、その必要性を再確認することができた。また、現在は三次元による着装シミュレーション技術が進化し、バーチャルマネキンの体幹や四肢を自由に動かすことが可能ではあるが、動作時の身体形状や寸法の変化には対応していない。バーチャルマネキンに対し、身体の動きによる変化量を加えることができれば、あらゆる姿勢を想定した衣服開発が可能となるだろう。

2日目の「ユニバーサル衣料の衣服設計を考える」と題された講演では、脊髄損傷者である選手の方々の話を交えながら、ユニバーサル衣料の設計について紹介いただいた。特に印象的であったのは、発汗機能を失った脊髄損傷者は、汗の代わりとして練習の合間に霧吹きで水をかけているという話であった。例えば、運動中に“身体へ適度な水分を付与する衣服”が実現されると、この問題は解決するだろう。スマートテキスタイルの開発が進む今日、将来的に、そのような衣服の実現を目指した繊維の開発を期待したい。

見学会は信州大学繊維学部Fiiコースに参加した。古くからあるという附属農場の側に、最先端研究設備を持つFii施設はあり、ファイバー産業を牽引する繊維学部の歴史と継承される研究へのエネルギーを感じることが出来た。施設内では、「医療福祉用ロボティックウェアcurara®の開発と展望」と題された講演で紹介されたcurara®を実際に装着し歩行する様子を見ることができた。開発者らも述べているように“衣服を着るように”と日常生活の一部として取り入れること目指したロボットは、繊維や衣服を科学的に研究してきた繊維学部でなければ開発に至らなかったであろう。家政学は、人間を中心とした日常生活の質の向上を目指す学問であり、今後はロボット分野を始めとする様々な新しい分野と連携することにより、生活の質を画期的に向上させるような新技術を創り出すことが可能であると感じた。

先日、ファッションECサイトを運営する大手企業が伸縮センサーを内蔵した採寸スーツを発売した。衣服とテクノロジーの融合が本格化してきている。やはり被服学においても他分野と融合することで、双方が研究してきた情報が活かされることだろう。今後、あらゆる条件の人々の衣生活向上のためには、東京五輪を控え急速化する様々な技術開発をいかに衣服設計に取り入れるかが、重要な課題であることを痛感した。

# 平成29年度 被服構成学部会 公開研究例会報告

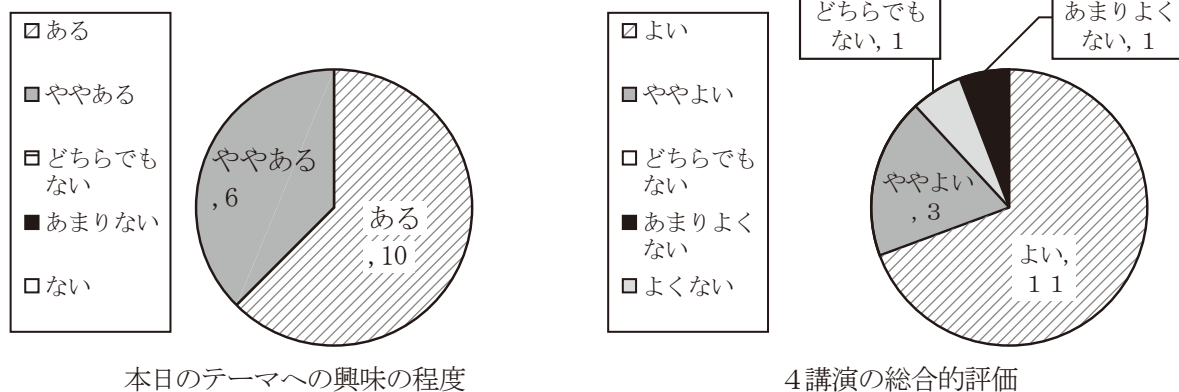
## 「ICTの活用から探る被服製作学習の改善」

埼玉大学 川端 博子

今年度の公開研究例会は、学習者と教員を支援する方策の一つとして ICT の活用を取りあげ、2018年2月27日(火)13:00～16:30 日本女子大学 新泉山館 小会議室3室で開催した。45名(32名,他13名)の参加があった。プログラムは以下のとおりで、次ページ以降に講演要旨を記載する。

13:25～13:30	部会長挨拶
13:30～14:30	<講演1> 「教育現場の最新 ICT 環境の状況」 東京学芸大学 准教授 加藤直樹氏
14:40～15:20	<講演2> 「大学における被服教育での ICT の活用」 名古屋女子大学 教授 小町谷寿子氏
15:25～15:45	<授業実践事例> 「技術・家庭科での ICT を活用した布を用いたものづくり学習」 埼玉大学 教授 川端博子氏
15:50～16:30	<講演3> 「新学習指導要領から見る被服製作学習の動向と ICT の位置づけ」 広島大学 教授 鈴木明子氏

参加者からのアンケート結果は、以下のとおりである。



### その他の意見 (抜粋)

・授業に活用ができそうで、有効な例会であった。・演習・勉強会もあったらうれしい。(2件)・被服製作をどのように小中高大で取り扱うのか有益な示唆を得た。・家庭科と造形学の被服に隔たりを感じるが、最後の司会の先生の締め言葉に重みを感じた。・学習指導要領の考え方が理解できた。・ICTを活用して技能が習得できるのか注目していきたい。・教職関連の内容で興味深く感じた。大学で教員免許を取得する学生にどのレベルまで教えたらよいか悩ましく思っており、討論の機会がほしい。

準備にあたり、大塚先生、鳴海先生、鈴木先生、武本先生はじめ運営委員の先生方のご尽力にお礼を申し上げますとともに、事後アンケートからは、参加の皆さまには概ね満足をいただけたようで安堵している。

東京学芸大学 教育実践研究支援センター 加藤 直樹氏

### 1. はじめに

情報通信技術 (ICT) の発展と社会への浸透に伴い、教育においても情報化への対応が必須となってきています。これからの社会を支えていくためには、主体性を発揮しながら他者と協働し新たな価値を創造していくことが大切であり、そのために、学習指導要領改訂に向けた答申では、知識・技能、思考力・判断力・表現力、人間性・学びに向かう力の三つをこれからの子どもたちに育むべき資質・能力として整理しています。

本講演では、これらの力を育むことを目指した次期学習指導要領 (平成29年3月公示) とICTの関係、ICTを活用することによる学びへの効果、そしてICT環境の現状と今後について述べます。

### 2. 次期学習指導要領とICT

次期学習指導要領では、言語能力、問題発見・解決能力と並んで“情報活用能力”を学習の基盤となる資質・能力として位置付け、その育成を図ることとしています。情報活用能力を学習の基盤とするということは、身につけた情報活用能力を用いることで教科等の学習活動を充実させるということです。そして、情報活用能力を身につけるために最も重要な活動はICT機器を使うことです。つまり、日々の学びの中で児童生徒がICT機器を活用する活動を取り入れることで、二つの目的の達成を求めているということになります。



### 3. 教師と児童生徒によるICT活用

先に述べた三つの資質・能力を確実に身につけさせるためには、個に応じた指導の充実が必要であるとしています。一斉授業で個に応じた指導とする一つの手

段が教師によるICT活用です。児童生徒はそれぞれ視聴覚能力の特性が異なります。また、大人に比べて同時に処理できる情報量が少ないです。ICT機器を使うことで様々な感覚チャンネルを使った伝達や認知負荷を下げる工夫が容易になります。

一方の児童生徒によるICT活用については、特に学習者用端末の活用が注目されています。学習者用端末を用いることで、たとえば、知覚できる情報を質的にも量的にも増やせます。また、多彩な表現ツールによって思考の可視化が容易になり、自己や他者の思考の認知を促進します。これらの効果は深い学びの実現につながるはずですが。

家庭科教育では、動的な視覚情報 (動画) の提示が有効であることが示されていますが、さらに複数のアングルからの動画を同時に提示することや、児童生徒の作業を動画で記録し、学び合いや評価に活用することも、効果的でしょう。

### 4. ICT環境の現状と今後へ向けて (おわりに)

学びへの効果が期待できるICT活用には言うまでもなくICT環境の整備が不可欠です。次期学習指導要領ではICT環境を整えることが明記されました。

第2期教育振興基本計画では、教育用コンピュータとして児童生徒3.6人につき1台としていますが、現状の全国平均は5.9人/台に留まっています。このような状況ですが、さらに第3期教育振興基本計画では3人/台が示される予定です。1日6時間授業とすれば、そのうち2時間は利用できるという数値です。これが次期学習指導要領に沿った学習活動に最低限必要な環境ということです。

このような環境が整ってくれば、これまでは大学生向けに行ってきたICTを活用した授業スタイルを小中高校にも適用していけるようになると思います。

※加藤研究室 web サイト <http://iml.u-gakugei.ac.jp/>

名古屋女子大学 小町谷 寿子氏

大学における被服教育の特徴は、実習を含む広範囲な授業構成にある。本報告の前半では、実習科目の理解を助けるコンテンツの検討について、また後半では、より広範囲な被服科目の俯瞰的理解を助けるための ICT 環境の検討について報告する。

実習科目における学生の理解を深めるには、学生ひとりひとりのペースに合わせて学習を進めることが望ましいが、限られた授業構成のなかで学生それぞれの進度を合せた指導をするには限界がある。このため、授業時間外の自由なアクセスを可能とする e-Learning 環境の整備が重要と考えた。

実習科目の e-Learning を進めるには、わかりやすいコンテンツをまとめる必要がある。ICT 活用の検討として、まずこの点に取り組んだ。

最初の取り組みは、ポケットやブラウスなどの部分縫いや、袴や浴衣の製作などをテーマとした部分コンテンツの検討である。学生のグループワークによるアクティブラーニングの形で、学生とともに、コンテンツをまとめ、グループ発表のなかで評価をした。

初期のコンテンツは、図や静止画を組み合わせたものであったが、ここに動画やアニメーション、音声を加えることで、より分かりやすいコンテンツへ内容の充実を図った。動画やアニメーションの活用などは、実際の利用環境では、動作速度など学生が利用可能な端末での使い勝手を追究する必要があった。これらの検討は、大学の情報部門の関係者の参加を得て進めた。

こうして得られた部分コンテンツが、実際に学生の理解につながることを、我々はアンケート形式の評価で確認した。製図方法に係るコンテンツを例にみると、わかりやすさに係る学生自身の回答とともに、教員による製図のチェック評価を比較することで、学生が難しいと感じる点が正しく改善されることを確認できた。

さらに、スカート製作をテーマとした被服実習コンテ

ンツを作成し、学習効果の検討をした。

実習科目における部分コンテンツの検討に続き、より広範囲な被服科目相互の位置づけを俯瞰的に理解させるための ICT 環境の検討に着手した。

我々は、動作環境として LMS (WebCT) を活用し、「アパレル材料基礎」、「アパレルデザイン基礎」、「アパレルパターン基礎」、「アパレル構成基礎」という基礎 4 領域をリンクにより相互に連携させることで授業間の溝を埋め、学生が横断的に被服学をとらえることができるシステムを構築した。分野別コンテンツの制作においては、実習科目で検討した部分コンテンツのノウハウを適用し、それらを WebCT システム内でリンクすることで、科目間を横断的につなぐようにした。得られた ICT 環境における学生それぞれの理解度を評価することで、学習効果を確認することができた。

一方、WebCT による ICT 環境においては、コンテンツの一つひとつがリンクによって結ばれるため、学生はテーマに沿ってリンクされたページコンテンツを一枚一枚見ることになり、より広範囲の学習内容を理解するには全体の中での位置づけが分かりにくいという点が課題として抽出された。

我々は現在、被服科目相互の関係をよりビジュアルに把握できるようにする Prezi によるアクティブラーニング環境の検討を進めている。Prezi は、これまでのいわゆる紙芝居形式でページを順番に提示するのではなく、プレゼンテーションの内容を広大なシートに配置することができ、その情報やコンテンツを順にあるいは自由に、ズームしながら見ることができることを特徴とする。本報告の最後に、最新の検討状況を報告する。

本報告の内容の一部は、平成 21 年から平成 23 年度科研費助成により進めた「e-Learning のための被服関係カリキュラムの横断的展開」の研究成果による。



## 授業実践事例

### 技術・家庭科での ICT を活用した布を用いたものづくり学習

埼玉大学 川端 博子氏

#### 1. 目的

近年、国の政策により教育機関における ICT 機器の整備が進む中で、ICT 活用のための教材・教育プログラムの開発とその効果を検証して、有効な利用を進めることが求められている。本学部附属中学校にも平成 25 年度よりタブレット PC(以下 TPC と表記)が導入され、さまざまな学習活動で使われている。

家庭科の布を用いた製作学習に目を向けると ICT の活用は少ない。生徒の技能レベルが低下している状況下で、教師は、小学校で学習する内容の復習から始め、細かな手作業を教室全体に示すために何回も示範を繰り返している。進行が停滞しがちで、進度差がでてくる中で 1 人の教師が 1 クラスを指導するには、従来から行われている方法では限界がある。

今回、布を用いた製作の工程を説明する動画資料を用意し、TPC を活用して実習を試みた。基礎縫いについては、市販の DVD やインターネット上に公開されている動画資料をスクリーン等に投射しながら全体説明に用いた実践報告がみられるが、児童・生徒・学生が TPC を手元に置いて動画資料を参考にしながらの授業実践例も少なく、その学習の効果も明らかにされていない。

本研究では、生徒にとって動画資料が基礎縫いの理解と技能の向上および布を用いた製作学習にどのような改善をもたらすか、教師の指導はどう変化するかをとらえ、生徒・教師両面からの ICT 活用の効果について考察した。

#### 2. 方法

授業に先立ち、基礎縫い(玉結び・玉どめ・まつり縫いなど (<http://park.saitama-u.ac.jp/~hihuku>)とトートバック製作の過程(未公開)を閲覧できる動画資料を作成した。トートバックの製作学習では、動画、黒板に製作工程ごとの段階見本、説明書の 3 資料を用いた。

平成 26 年 6 月と 11 月、附属中学校 2 年生 4 クラス(174 名)を対象に、基礎縫いの一斉指導(1・2 時間目)と、生徒の進度に応じた個別指導が必要となるトートバック製作学習(9・10 時間目)を観察した。今回は個別指導について報告する。9 時間目は 2 クラスでは班に 2 台ずつ TPC を配付し(TPC 利用)、2 クラスでは教師机に 2 台置き、班に配付しなかった(TPC 利用なし)。生徒の学習活動の観察と感想、教師の机間指導をもとに、TPC 利用のあり・なしで傾向を比較した。

#### 3. 結果と考察

(1) 生徒調査 生徒は、製作活動の中で、動画資料を他の資料よりもよく利用しており、とりわけ進行の遅い生徒による利用が多くみられた。また、授業後の質問紙の回答より、動画資料は課題解決の有効な手段となり、製作工程の理解を促す効果が確認された。

(2) 教師調査 教師の机間指導の観察からは、動画資料の手元での利用により、机間指導の動線距離がやや増加し、個別的な直接指導は進行の遅い生徒に重点的になされていた。これらは TPC 利用によって生徒の自己解決が促された結果、教師の示範による停滞が減り、全体に目を配らせて指導がなされたためと考察する。

一連の研究を以下に公表している。

1. 川端博子他、布を用いたものづくり学習における動画資料活用の効果、教育情報研究 32(3)3-12(2016)
  2. 高橋美登梨他、針と糸を使った製作学習における ICT 活用の提案：教員養成系学部の大学生を対象とした動画教材の効果の検証日本家庭科教育学会誌 59(3)135-146(2016)
  3. 川端博子他、中学生の基礎縫い技能の実態と動画教材を用いた指導の試み、埼玉大学教育学部教育実践総合センター紀要(16)111-116(2017)
  4. 川端博子他、ミシンを用いた製作学習における ICT 活用の提案埼玉大学紀要 教育学部 66(1)1-11(2017)
- 一連の研究は、科学研究費補助金 26350036 により行った。

## 講演 3

# 新学習指導要領から見る被服製作学習の動向と ICT の位置づけ

広島大学 鈴木 明子氏

### 1. 新学習指導要領における家庭科教育観

新学習指導要領では、「何を学ぶか」という教育内容を重視しつつ、子供がその内容を既得の知識等と関連付けながら深く理解し、他の学習や生活場面でも活用できる生きて働く知識となるようにすることが求められている。そのためには、学習内容を支え動かす力（コンピテンシー）をいかに育てていくかを指導のねらいとして設定する必要がある。学校教育課程の一教科である家庭科でも同様に、どのような資質・能力を身に付けるのか、教科目標に沿って題材目標の中で明確にし、最適な教材や指導方法を選択しなければならない。

家庭科で担う資質・能力の3つの柱は、①日常生活に必要な家族や家庭、衣食住、消費や環境等についての基礎的な理解と技能、②日常生活の中から問題を見いだして課題を設定し課題を解決する力、③生活をよりよくしようと工夫する実践的な態度である。これらは、生涯にわたり健康で豊かな生活を送るための自立の基礎となり、共生する生活を創造するための資質・能力である。

また、今回の改訂では各教科の本質と独自性として「見方・考え方」が示された。家庭科の目標にある「生活の営みに係る見方・考え方」は、「生活事象を、協力・協働、健康・快適・安全、生活文化の継承・創造、持続可能な社会の構築等の視点で捉え、よりよい生活を営むために工夫すること」として整理している。

このような家庭科教育観に基づいて、「衣生活」の学習では、衣服の着用と手入れ、布を用いた製作に関す

る基礎的・基本的な知識・技能を身に付け、衣生活の課題を解決する力を養い、衣生活をよりよくしようとする実践的な態度を育成することがねらいとなっている。そこでは、「理解・技能」に係る学習内容と「思考力・判断力・表現力」に係る学習内容を明確に区別して示したことも特徴である。また、小学校では、これまでの「生活に役立つ物の製作」が中学校と同様に「生活を豊かにするための布を用いた製作」とされた。

### 2. 生活を豊かにするための布を用いた製作

「生活を豊かにするための布を用いた製作」のねらいは、小学校では、布を用いた製作を通して、課題をもって、製作に必要な材料や手順、製作計画、手縫いやミシン縫いによる目的に応じた縫い方及び用具の安全な取扱いに関する基礎的・基本的な知識及び技能を身に付け、製作計画を考え、製作を工夫することができるようにすることである。中学校ではさらに資源や環境に配慮して製作計画を考え、製作を工夫することができるようにすることをねらいとしている。

「生活を豊かにするための布を用いた物」とは、身の回りの生活を快適にしたり、便利にしたり、楽しい雰囲気を作り出したり、家族や地域の人などとのかかわりを深めたりする物など、布の特徴を生かして自分や身近な人やその生活を豊かにする物のことである。中学校では、さらに資源や環境に配慮して、自分や家族、地域の人々の生活を豊かにする物を製作することである。布を用いた製作は、生活に役立つばかりではなく、他者との関わりを深めたり、生活文化への関心

を高めたり、持続可能な社会の構築について考えたりすることにつながり、生活を豊かにするための営みに係るものである。また、製作を通して自分自身が豊かな気持ちになることに気付くことができる。

### 3. 「布を用いた製作」の指導上の留意事項

新学習指導要領における学力観においては、家庭科の「布を用いた製作」学習は、科学的な思考を発達させ、豊かな生活を志向させる場として機能することによって、その教育的意義を説明できると思われる。そのため、指導上、次の点に留意する必要がある。

- (1) 児童・生徒の製作への関心・意欲を高める情報提供及び学習環境の工夫
- (2) 児童・生徒の実態や個人差に応じた段階的理解を可能にする指導方法の工夫
- (3) 達成感を味わいながら基礎的・基本的な技能を習得させる題材の選択や順序の配慮
- (4) 製作の見通しや根拠を重視した問題解決的な学習の仕掛け
- (5) 製作計画の振り返りと自己評価の機会の提供

### 4. 「布を用いた製作」学習と ICT 活用

ICT 活用について、これまでも学習場面で大型テレビや OHP、プロジェクター、映像資料等を活用してきたが、今後はより一層の ICT 活用が求められている。また、ただ活用するだけではなく、児童・生徒にどのような力を身に付けさせたいのかを意識して、意図的、計画的、効果的に活用していく必要がある。知識・技能の習得については、実践的・体験的な活動を通して科学的な理解を深めるような ICT 活用が重要である。布を用いた製作活動では、基礎的・基本的な技能を映像で確認したり、自分の縫製作業や動作をタブレット端末で撮影して実習後にそれを観察し振り返ったり、自分や友達の子の作品の写真を記録して課題をみつけたり

するなど、自分の活動を客観的に振り返り、考える活動を通して、より理解を深めるような活動が求められている。思考力、判断力等の向上には、グループによる話し合いの場面でタブレット端末を活用し、個々の考えや意見を共有したり、発表場面で ICT 機器を効果的に活用したりすることによって、主体的で対話的な学びが可能になる。さらに製作場面で作品のイメージがわからない児童生徒に映像資料で作品例を紹介したり、作り方の手順を見せたりするなど、個に応じた支援として ICT を活用することも必要である。

### 5. 「布を用いた製作」学習とプログラミング的思考

プログラミング的思考とは、「自分が意図する一連の活動を実現するために、どのような動きの組み合わせが必要であり、一つ一つの動きに対応した記号をどのように組み合わせたらよいのか、記号の組み合わせを改善していけばより意図した活動に近づくのかといったことを論理的に考える力」である。つまり、布を用いた製作では、製作手順を考える活動がプログラミング的思考を育成するための学習活動である。

プログラミングの知識や理解について、「小学校段階におけるプログラミングの教育の在り方について」(H28. 6.) には、「身近な生活でコンピュータが活用されていることや、問題の解決には必要な手順があることに気付くこと。」と示されている。コンピュータミシンで、ボタン付けやボタンホールを作るための針の動きが、内蔵コンピュータによってプログラミング制御されていることを知ることも家庭科における学習活動の一例である。効率的に製作を行う手段として ICT を活用するだけではなく、身近な生活や生活行動の中にあるプログラミング的思考を育てる教材にも目を向け、未来の生活者を育てることも家庭科の使命である。

## 若手研究者研究紹介

### 動作の分類からみた幼児期の着脱の特徴

#### —3歳児および5歳児の観察から—

東京学芸大学大学院 高橋 美登梨

#### 1. 研究の背景

着脱は基本的な生活習慣のひとつであり、発達検査の指標にも用いられる動作である。習得の目安となる年齢については検討されてきたが、動作の特徴については明らかにされていないことが多い。幼児は着脱を生活の一部として行っているため、月齢によっては着脱のみを客観的に観察することは困難である。しかしながら、動作の特徴を捉えることは保育者の援助の方法や衣服の形態を検討するための基礎資料になると考える。そこで、本研究では自立して着脱を行うことができる5歳児を対象に区切られた空間で1人ずつ着脱を行い、動作をパターン化した後、3歳児を対象に通常保育の様子から着脱の特徴を考察した。ここでは、近年こども服として増加しているニット製のかぶり型衣服の脱衣および前あき上衣の着衣について報告する。

#### 2. 方法

##### (1) 5歳児の観察

観察対象は幼稚園5歳児（年長クラス）57名（男児27名、女児29名、男女ともに平均72.6ヶ月）、時期は2014年10月である。対象児は1人ずつパーテーションで区切った空間で園指定の体操服（半袖・半ズボン）から制服（ブラウス・ブレザー・スカート／半ズボン）への着替えを行った。着脱の順番については観察者が指示を出したが、それ以外の動作は任意とした。観察時に援助を必要とする対象者はいなかった。動作をビデオカメラで正面から撮影し、解析は画像から行った。なお、対象児が拒否の意思を示した場合には直ちに観察を中止した。

##### (2) 3歳児の観察

対象は入園直後の3歳児（年少クラス）とし2016年6月～2017年2月に計15回の調査を行った。観察対象は、幼児20名（男児10名、女児10名）と保育者2名である。対象児が園生活に慣れていないことや言語の発達状況等を考慮し、通常保育の登園時の着脱場面をビデオカメラ3台で撮影することとした。通園服、園内服ともに指定服はないがおおよその形態は統一されている。

#### 3. 結果と考察

##### (1) ニット製のかぶり型衣服の脱衣

5歳児の動作を観察したところ、半袖体操着（ニット製のかぶり型衣服）の脱衣の動作プロセスは図1に示す通り、「腕から抜く型」、「裾を持ち上げる型」、「首元から抜く型」の3パターンに分類できた。約8割は「腕から抜く型」で脱衣していた。成人女性では「腕から抜く型」は4割程度であると報告されており<sup>1)</sup>、かぶり型衣服を腕から脱衣するのは幼児期の特徴であるといえる。幼児は頭部が大きいいため、腕から抜く方法が合理的であると推察される。

次に3歳児の脱衣場面より、保育者の援助の割合を集計した結果を図2に示す。ここでは、保育者が対象児に対して衣服の着脱の手助けした内容を「援助」とした。脱衣に対する主な援助は、腕や頭を抜く、下衣から上衣を出す（下衣にしまっている上衣を出す）、留め具をはずす、下衣を脱がせるであった。図2の脱衣の援助の内容をみると、「腕や頭を抜く」に対する援助の割合が高いことが分かる。主に気温が高く汗をかいていた日や半袖から長袖に着用する衣服が変化する時期、



体型に対してゆとり量の少ない衣服を着用している場合には保育者の援助を必要としていた。脱衣は着衣よりも習得が早いとされているが、3歳児は状況によっては援助を受けながら脱衣するといえる。

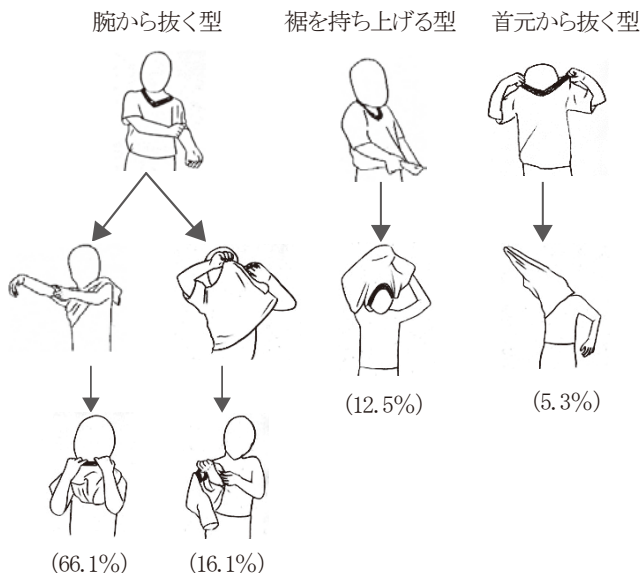


図1 被り型衣服(体操服)の脱衣パターン-5歳児-

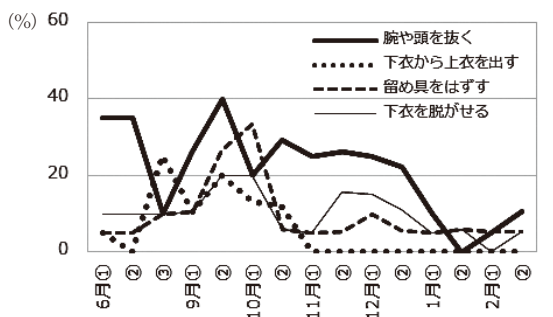


図2 脱衣に対する援助の内容と割合-3歳児-

以上より、ニット製のかぶり型衣服の脱衣は5歳児の観察から成人とは異なり腕から脱衣することが多いこと、さらに3歳児では脱衣において腕や頭を抜くことに対する援助が多いことが示された。したがって、幼児にとって「抜く」のは難しい動作であると考えられる。

## (2) 前あき上衣の着衣

5歳児の前あき上衣(ブレザーとブラウス)のはおり方を観察したところ、ブレザーとブラウスの方法が同じである対象者は94.6%であり、動作は習慣化しているといえる。

3歳児の着衣場面より、保育者の援助の割合を集計した結果を図3に示す。着衣に対する主な援助は、上衣を整える、羽織らせる、ボタンをかける・かけ直す、ズボンに足を通すであった。図3より、着衣の援助として「羽織らせる」の割合が高いことがわかる。羽織る動作は腕や袖を通す際に衣服の上下や左右といった形態を理解する必要があり、3歳児では衣服の形態を十分に理解できていないと推察される。

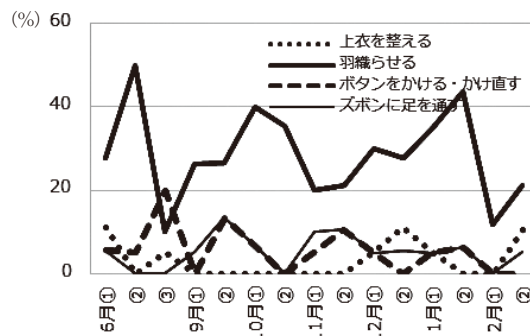


図3 着衣に対する援助の内容と割合-3歳児-

以上より、3歳児から5歳児の間に羽織る動作を習得するといえる。以前、集団保育の保育者を対象に行った調査<sup>2)</sup>において、3歳児から5歳児の間に衣服の前後や裏表を理解するとの結果が得られている。したがって、3歳児から5歳児の間は衣服の形態を理解しながら動作を習得する時期であるといえる。

## 4. 今後の展開

本報告では、脱衣においては「抜く」動作が難しいこと、着衣では3歳児から5歳児の間に衣服の形態を理解しながら動作を習得することが明らかになった。3歳児の動作についても5歳児の動作パターンをもとに解析を行うことで、動作を習得する過程等をより詳細に捉えられると考えている。

本報告は、目白大学総合科学研究 (13, 107-116, (2017)) および第69回日本家政学会において発表した内容をまとめたものである。また、研究の一部は文部科学省科学研究費補助金 (課題番号24700792) によって行った。

### 【引用文献】

- 1) 谷水香奈美, 村木里志. 高齢女性のかぶり式半袖上衣の脱衣動作における肩関節の動き. 日本衣服学会誌, 56, 81-89, (2013)
- 2) 高橋美登梨, 川端博子, 鳴海多恵子. 集団保育における着脱動作に対する保育者の意識. 家政誌, 67, 151-160, (2016)

## 第18回全国中学生創造ものづくり教育フェア報告

横浜国立大学 薩本弥生

「全国中学生創造ものづくり教育フェア」は、中学生に競技会や作品展で、ものづくり学習の成果を発表し、表彰されることを目指して競い合うことを通じて、ものづくりの楽しさや興味関心を高めることを意図し、ものづくり教育の充実と発展、社会への理解・啓発を図ることを趣旨として開催されている。今年度は、東京都葛飾区源総合スポーツセンターで2018年1月20日、21日に開催された。

1日目は「豊かな生活を作るアイデアバッグ」コンクールが開催され、部会からは審査委員長として審査に関わった。全国から予選で勝ち抜いてきた16人の中学生の参加者たちが各々事前に提出した製作計画レポートに書かれた製作工程に基づき、布、型紙、材料を決められた予算の中で用意して、3時間半の決められた時間の中で家族や教員に見守られながらも、規定時間内は応援や助言の声掛けは禁止されているため、生徒たちは無言で集中して黙々と製作していた。審査は4つの審査項目に基づき、厳正に行った。1事前の製作レポート、2製作の様子、3プレゼン、4作品の出来である。まず、製作レポートは、「豊かな生活を創る」をテーマに自分自身、家族への思いがこもった作品が多く、製作工程のイラストも分かりやすく整理されていて、すてきな作品で、さすが予選を勝ち抜いた生徒たちだと感心させられた。本番の製作は一定の技術レベルが保たれていた。中でも賞を得た人は目打ちを使って角だしをしたり、ミシンで曲線を縫う時に目打ちで押えていたり、アイロンでこまめにプレスしたり、と道具を使いこなしていた。プレゼンは、各自のアイデアが上手にPRされていてすばらしかった。

防災やリメイクなどの衣生活の社会的ニーズや使う人のニーズを調べて、家庭科で育てたい課題解決的なコンセプトのものも多く見られた。

家族のニーズを知るためにコミュニケーションを取り、家族の絆が深まったという人もいた。ものづくりの過程で段取りを立てる能力や製作する力が求め

られ、大会で競い合う中で何度も修正を加えながら練習をする中で、成長されたと思われた。将来、参加者の何人かが家庭科の教員など、ものづくりの楽しさを伝える仕事についていただけたらと思った。



コンクールの様子

ティッシュボックスカバー体験コーナーには、2日間で26名（うち男性3名）が参加した。見本作品に多くの方が興味を示し、中学生、付添の先生や親、兄弟など年代、性別を問わず体験され好評を得た。体験者は、出来上がり作品に大変満足した様子で、家や車の中で使おうという声が聞かれた。また、現場の先生からは、授業で扱う場合のポイントや必要時間数などの質問もあり、作り方パンフレットを持ち帰っていかれた。



体験コーナーの様子

## 関連学会短信

### 日本繊維製品消費科学会報告

日本女子大学 大塚 美智子

2017年年次大会（2017年6月24日・25日）京都女子大学で開催された。参加人数は290名で、口頭発表が70件、ポスター発表59件、企画発表7件であった。全体的に発表件数が昨年より下回ったが、特に構成・被服製造関係は15件と大きく減少した。家政学会における被服構成学部の会員は決して少なくはないが、昨年度信州大学からの発表で発表件数が増加したものの、年々減少傾向をたどっている。この要因はどこにあるのだろうか、部会として被服構成学の研究者の研究環境について真剣に考える時期に来ていることを痛感した。

35歳以下に対する若手優秀発表賞は4名に、ポスターベスト発表賞は30歳以下の1名に授与され、これらの賞にエントリーする若手は増えており、若手にとって今後の活動の力となるものと思われる。

特別講演は（一社）ウイメンズ・エンパワメント・イン・ファッション 会長・代表理事 尾原蓉子氏により、「ファッション・ビジネス：創造する未来」—未来は予測するものではなく、創るもの—をテーマに行われたが、ファッション・ビジネスの過去、現在、未来を詳細なデータに基づき講演いただき極めて興味深い内容であり、盛況であった。また企画発表は日本の美伝統と現代、環境素材、スマートテキスタイルと京都ならではのテーマを織り交ぜた魅力的なものであった。日本繊維製品消費科学会は企業からの参加が多く、企業展示も15社あり、内容的には充実していたが、この学会も参加者拡大が今後の課題であろう。

### 日本衣服学会報告

共立女子大学 丸田 直美

日本衣服学会第69回（平成29年度）年次大会（大会長は尚絅学院大学の久慈るみ子氏）は、平成29年10月28日（土）に東北福祉大学仙台駅東口キャンパスにて開催された。本学会は、「広く衣服及び衣生活教育全般にかかわる諸問題を総合的視野にたつて研究を行う学術団体」とされている。今年度は、口頭発表14演題、ポスター発表7演題の発表が行われ、発表内容は被服教育、着物文化、洗濯、被服材料、被服造形、快適性等と非常に幅広く、発表者の年齢も学生からベテランまで様々で、質疑応答も大変活発であった。

特別講演は、「東日本大震災と石巻専修大学」と題し、石巻専修大学教授で学長の坂田隆氏にご講演いただいた。同大学は東日本大震災の発生以前から地域との連携関係があったこともあり、震災直後から様々な復興共生プロジェクトを地域と共同で行なわれたということで、現在に至るまでの様々な取り組みについてお話いただいた。震災直後と現在では表面化する問題も変わってきているとのことであった。また、プロジェクトの最終目的が被災地の復興ではなく、大学の教育研究の高度化だというお話は大変興味深かった。

夕方からはJALシティホテル仙台に場所を移し、懇親会が開催された。優秀発表者2件の表彰も行われた。仙台の夜景を楽しみながら参加者同士の懇親を深めることができた。

翌日29日（日）には第2回見学会が芹沢銈介美術工芸館で行われた。同美術館は、芹沢銈介が集めた世界各国の工芸品が収蔵されている美術館で、染織品、木工品、土器・土偶、編組品、装飾品、家具など多岐にわたっており、各民族の生活に深く根ざした作品の展示を見学した。

本学会は来年70回の記念大会を迎えることになり、来年は京都教育大学で開催される予定である。



## アジア地区家政学会（ARAHE）報告

広島大学 村上 かおり

第20回ARAHE Biennial International Congressが、Tradition and Innovation -Home Economics Challenges for Sustainable Livingをテーマに、2017年8月6日から10日まで、東京の国立オリンピック記念青少年総合センターにおいて開催された。

参加国および参加人数は、参加人数が多い順に、日本(242名)、韓国(28名)、中国(15名)でその他、フィリピン、シンガポール、台湾、ガーナなど21カ国、計342名であった。

スケジュールは、8月7日にOpening Ceremony、基調講演1-2、ポスター発表、口頭発表、シンポジウム1、Welcome Partyが、8日には基調講演3-4、ポスター発表、口頭発表、シンポジウム2、9日にはポスター発表、口頭発表、シンポジウム3、10日はCountry Presentation、Closing Ceremony、Farewell Partyと充実した内容となっていた。

なお、8月7日から9日まで、日本文化に関わるものも含め、複数のワークショップが開催された。

研究発表は、口頭発表66件とポスター発表78件が行われた。口頭発表では、Children and Families in Society、Clothing and Design、Home Economics Education、Health and Well-being、Nutrition and Food Science、Consumers and Sustainable Development、Government and Public Policies、Information and Technology for Living、Housing and Environmentの9つのセッションが行われたが、Home Economics Educationに関する発表が最も多く、25件がこの分野であった。Clothing and Designのセッションには6件の発表があり、うち4件が日本人の発表であり、あとの2人は韓国、インドネシアであった。

ポスター発表は、8月7日と8日の2日間、口頭発表と同じ9つのセッションに分けて発表が行われた。セッションごとの発表件数では、やはり Home

Economics Educationに関する発表が最も多く、36件であった。次にChildren and Families in Society、Clothing and Designのセッションが26件の発表と多く、うち22件が日本人の発表であり、あと韓国が3人、マレーシアが1人であった。

8月7日から9日までの3日間を通じて、6つのワークショップが開催された。そのうちのひとつは日本の家庭科(Kateika)をテーマにしており、日本の家庭科教育の内容を各国語に翻訳したテキストを閲覧することができた。また、日本の伝統文化に関わる内容のものとして、折り紙(Origami)、風呂敷(Furoshiki)、組紐(Kumihimo)のワークショップが設けられていた。いずれも好評で、参加者たちは、折り紙を体験したり、風呂敷で四角い箱や長い物、瓶やボールの包み方の指南を受けたりして日本の文化を楽しんでいた。

エクスカージョンは浴衣着装体験など日本文化体験と学校訪問でそのうち文化学園大学および文化学園服飾博物館のうちから1コースを選択して訪問した。



Farewell Partyでは、各国の参加者がさまざまな出し物を披露した。日本の参加者の多くは浴衣を着て、各国からの参加者と一緒に東京音頭を踊った。

日本で開催された国際学会だったこともあり、国内からの参加者が多く、若手も含め、国内外の研究者間の交流が活発に行われ、大変有益な大会であった。

## 平成29年度 研究動向（修士論文テーマ・科学研究費補助金研究課題）

### 「平成29年度修士論文テーマ」

「女子の第二次性徴に関わる下着教育に関する研究—ブラジャー装着の指導に着目して—」

庄莉莉（指導：鈴木明子・村上かおり）広島大学大学院教育学研究科教科教育学専攻 人間生活教育学専修

「化粧による顔の印象の変化に関する研究」

末岡奈々（指導：村上かおり）広島大学大学院教育学研究科教科教育学専攻 人間生活教育学専修

「衣服表現におけるパターン設計と動作適応—上衣ゆとり量と動きやすさの構造—」

山村美紀（指導：猪又美栄子）昭和女子大学大学院 生活機構研究科 環境デザイン研究専攻

「自立シニア女性におけるファッションと色彩の効用—意識構造と印象評価の観点から—」

白土博子（指導：石垣理子）昭和女子大学大学院 生活機構研究科 環境デザイン研究専攻

### 「平成29年度 科学研究費補助金 研究課題」

#### 基盤研究（A）

「アパレルの質と国際競争力向上の基盤となる日本人の人体計測データの構築と多角的分析」，平成25年から29年度，研究代表者：日本女子大学 大塚美智子

#### 基盤研究（B）

「スタイル画の創造性を活かした個人対応ファッションデザインのための基盤技術開発」，平成27年から29年度，研究代表者：滋賀県立大学 森下あおい

「着衣と人体生理状態を考慮した無線通信による熱中症予防支援システムの構築」，平成27年から30年度，研究代表者：横浜国立大学 薩本弥生

「アパレルの国際競争力の強化を目指した3Dバーチャル工業用ボディの開発と性能評価」，平成28年から31年度，研究代表者：京都女子大学 渡邊敬子

## 基盤研究 (C)

「「量産衣料のデジタル仮縫い工房」開発のためのベーシックパターンモデルの検討」, 平成27年から29年度, 研究代表者: 文教大学 土肥麻佐子

「こころとからだの関係から考えるパーソナルファッションとその教材化に関する研究」, 平成27年から29年度, 研究代表者: 広島大学 村上かおり

「アパレル製品設計のための50代女性の3Dシミュレーションモデル開発に向けての研究」, 平成28年から30年度, 研究代表者: 共立女子大学 丸田直美

「布を用いた製作学習の学習効果を高める方策と支援」, 平成29年から31年度, 研究代表者: 埼玉大学 川端博子

「障害者の修正衣服ガイドライン作成に向けた更衣と座位姿勢に適したズボンの製作と評価」, 平成29年から31年度, 研究代表者: 熊本大学 雙田珠己

( (注) 継続研究と部会員の皆様への呼びかけに対してお申し出頂いた分のみを掲載しました. )

# 会 務 報 告

## 1. 平成 29 年度会務報告

### 1) 事業報告

#### ① 総 会

日時：平成 29 年 5 月 27 日（土）

場所：奈良女子大学 N 棟 3 階（G 会場）

#### ② 平成 29 年度家政学夏季セミナー

「生活の質的向上を目指す家政学の世界  
—オリンピック・パラリンピックがつなぐユ  
ニバーサル衣料の未来—」

日時：平成 29 年 9 月 3 日（日）4 日（月）

場所：信州大学教育学部（長野キャンパス）

#### ③ 全国中学生創造ものづくり教育フェアへの後援

日時：平成 30 年 1 月 20 日（土）21 日（日）

場所：葛飾区水元スポーツセンター

#### ④ 研究例会

「ICT の活用から探る被服製作学習の改善」

日時：平成 30 年 2 月 27 日（火）

場所：日本女子大学新泉山館小会議室 3 室

#### ⑤ 臨時総会

日時：平成 30 年 2 月 27 日（火）

場所：日本女子大学新泉山館小会議室 3 室

#### ⑥ 部会誌 39 号発行 平成 30 年 3 月 31 日（土）

#### ⑦ ホームページの維持管理

#### ⑧ 科学研究費（基盤研究（A））研究活動

(3) 平成 28 年度夏期セミナー会計報告

(4) 平成 28 年度会計監査報告

(5) 平成 29 年度予算（案）について

(6) 平成 29 年度家政学夏季セミナー（案）について

(7) 部会誌第 39 号編集案

(8) その他

#### ② 第 2 回運営委員会

日時：平成 29 年 9 月 3 日（日）

場所：信州大学教育学部 N201 教室

(1) 次期部会長および監事の推薦について

(2) 平成 29 年度研究例会について

(3) 部会誌 39 号編集案について

(4) 科研の進捗状況について

(5) 平成 30 年度夏期セミナーについて

(6) 規約改正について

(7) その他

#### ③ 第 3 回運営委員会

日時：平成 30 年 2 月 27 日（火）

場所：日本女子大学新泉山館小会議室 3 室

(1) 当日の研究例会について

(2) 臨時総会議題の確認と進行について

(3) 平成 30 年度夏期セミナーについて

(4) 中学生創造ものづくり教育フェアへの支援  
について

(5) 科研費研究活動について

(6) 各係の活動報告と引き継ぎ事項

(7) その他

### 2) 庶務報告

#### ① 第 1 回運営委員会

日時：平成 29 年 5 月 27 日（土）

場所：奈良女子大学 N 棟 3 階（G 会場）

(1) 平成 29 年度総会準備

(2) 平成 28 年度会計報告

### 3) 会計報告（次頁以降参照）

## 2. 平成 30 年度事業計画（案）

- ① 総会  
日時：平成 30 年 5 月 26 日（土）  
場所：日本女子大学
- ② 夏期セミナー（被服構成学部会創立 40 周年記念）  
「ファッションビジネス戦略における  
衣服サイズと身体サイズの最新動向」  
日時：平成 30 年 8 月 28 日（火） 29 日（水）  
場所：文化学園大学
- ③ 全国中学生創造ものづくり教育フェアへの後援  
日時：平成 31 年 1 月下旬  
場所：葛飾区水元スポーツセンター（予定）
- ④ 研究例会
- ⑤ 部会誌 40 号の発行
- ⑥ ホームページの維持管理
- ⑦ 科学研究費（基盤研究（A））研究活動
- ⑧ その他

## 平成28年度 被服構成学協会 夏期セミナー 収支報告書

◆夏期セミナー  
収入の部

費目	予算	決算	備考
参加費	350,000	352,000	部会員 8,000円×40名 中高教員 2,000円×4名 学 生 3,000円×8名
学会活動助成金	100,000	100,000	
部会会計より補助費	250,000	250,000	
合 計	700,000	702,000	52名

## 支出の部

費目	予算	決算	備考
1 講演会等会場使用料	98,280	98,280	
2 講演会等講師謝金	157,980	157,980	講師交通費を含む
復興特別所得税、源泉徴収税	15,918	16,259	16,259円本部へ納入
3 講演会等消耗品	168,160	139,029	
4 講演会等通信運搬費	30,000	13,508	
5 印刷費	30,000	0	
6 学会誌印刷代	45,000	51,840	
7 旅費交通費	60,000	24,940	
8 会議費	50,000	40,480	
9 予備費	44,662	8,000	
合 計	700,000	550,316	

差引残高

702,000-550,316=151,684

◆懇親会  
収入の部

費目	予算	決算	備考
大会等参加費(懇親会費)	165,000	202,000	部会員5,000円×35名、学生・中高教員3,000×9名
講演会等消耗品	20,000	20,000	講師4名分
予備費より補助		8,000	
合 計	185,000	230,000	

## 支出の部

費目	予算	決算	備考・領収書No.
講演会等消耗品(懇親会費)	185,000	230,000	10-1
合 計	185,000	230,000	

差引残高

230,000-230,000=0

## ◆徴収税

内 訳	金 額	備 考
講師謝礼徴収税	15,918	
講師交通費徴収税	341	
合 計	16,259	

日本家政学会本部会計に納入いたしました。

## ◆残金

平成28年度 夏期セミナーの残金 151,684円を被服構成学協会会計に納入いたしました。

平成29年 1月31日

会計 小山京子 渡部句子 田中早苗



# 被服構成学部会収支計算書

(平成28年4月1日から平成29年3月31日まで)

(単位:円)

科目	予算	決算	備考
I 事業活動収支の部			
1. 事業活動収入			
基本財産運用益			
特定資産運用益			
受取入会金			
受取会費	420,000	438,000	部会年会費
事業収入	480,000	554,000	
会誌購読料			
大会等参加費	480,000	554,000	夏期セミナー参加費
広告料			
学会刊行物売上			
著者負担金			
受取補助金			
一般寄付金			
特別寄付金			
雑収入	500	8	
★本部からの繰入金収入	100,000	144,548	活動助成金
事業活動収入計	1,060,500	1,136,556	
2. 事業活動支出			
① 事業費支出	1,368,000	1,220,352	
大会会場使用料			
大会消耗品			
大会印刷費			
大会通信運搬費			
大会臨時雇賃金			
講演会等会場使用料	250,000	98,280	夏期セミナー
講演会等講師謝金	250,000	218,787	夏期セミナー、研究例会
講演会等消耗品	300,000	349,029	夏期セミナー
講演会等通信運搬費	20,000	13,508	
講演会等臨時雇賃金			
学会誌印刷費	100,000	150,692	夏期セミナー要旨集、部会誌
学会誌通信費	25,000		
編集委員会費			
研究発表要旨集関連費用			
研究補助費			
表彰費	23,000	14,813	ものづくりフェア関連費用
関連学会費	10,000	10,000	協賛金
給料手当			
広報費	35,000	33,240	HP契約・維持費
福利厚生費			
旅費交通費	200,000	261,698	夏期セミナー、運営委員会
通信運搬費	15,000	5,160	
備品費			
消耗品費	10,000	431	
光熱水料費			
雑費	20,000	0	
総会費			
事務委託費			
租税公課			
地代			
会議費	100,000	62,260	夏期セミナー、研究例会
支払負担金	5,000	2,454	振込料
印刷費	5,000	0	
諸謝金			
修繕費			
減価償却費			
リース料			
事務所管理費			
② 管理費支出			
事業活動支出計	1,368,000	1,220,352	
事業活動収支差額	▲ 307,500	▲ 83,796	
II 投資活動収支の部			
1. 投資活動収入			
2. 投資活動支出			
投資活動収支差額	0	0	
III 財務活動収支の部			
1. 財務活動収入			
2. 財務活動支出			
財務活動収支差額	0	0	
当期収支差額	▲ 307,500	▲ 83,796	
前期繰越収支差額	1,264,598	1,264,598	
次期繰越収支差額	957,098	1,180,802	



# 貸借対照表

(平成29年3月31日現在)

(単位:円)

科 目	当年度	前年度	増減
I 資産の部			
1. 流動資産			
手許現金	48	0	48
普通預金(三菱東京UFJ銀行国分寺支店)	954,180	830,090	124,090
通常預金			
振替口座(ゆうちょ銀行〇一九)	226,574	434,508	▲ 207,934
流動資産合計	1,180,802	1,264,598	▲ 83,796
2. 固定資産			
部会大会基金引当預金			
定期預金(三菱東京UFJ銀行国分寺支店)	0	0	0
通常貯金(ゆうちょ銀行)	0	0	0
固定資産合計	0	0	0
<b>資産合計</b>	<b>1,180,802</b>	<b>1,264,598</b>	<b>▲ 83,796</b>
II 負債の部			
1. 流動負債			
未払い金			0
<b>負債合計</b>			<b>0</b>
III 正味財産の部			
正味財産			
1. 指定正味財産			
2. 一般正味財産	1,180,802	1,264,598	▲ 83,796
<b>負債及び正味財産合計</b>	<b>1,180,802</b>	<b>1,264,598</b>	<b>▲ 83,796</b>

## 監査報告書

一般社団法人 日本家政学会  
会 長 石井 克枝 殿


私ども監事は、平成28年4月1日から平成29年3月31日までの平成28年度の部会の重要な会議に出席するほか、事業報告を聞き、重要な書類を閲覧し、主要な調査を行い、かつ財務諸表及び収支計算書につき監査を実施した結果、次のとおり報告します。


1. 事業報告は規程に従い、部会の状況を正しく示しているものと認めます。
2. 財務諸表すなわち貸借対照表は平成28年度期末現在の財政状態を正しく示していると認めます。
3. 収支計算書は平成28年度の収支の状況を適正に表示していると認めます。
4. 理事の職務遂行に関する不正の行為または定款に違反する重大な事実は認められません。

以上

平成29年 4 月 4 日

一般社団法人 日本家政学会  
( 被服構成学 ) 部会

監事 鳴 海 多 恵 子 

監事 森 由 紀 

# 被服構成学部会収支予算書

(平成29年4月1日から平成30年3月31日まで)

(単位:円)

科 目	29年度予算	28年度予算	増減	備考
I 事業活動収支の部				
1. 事業活動収入				
基本財産運用益				
特定資産運用益				
受取入会金				
受取会費	420,000	420,000	0	部会費@4,000円×105名
事業収入	180,000	480,000	▲ 300,000	
会誌購読料			0	
大会等参加費	180,000	480,000	▲ 300,000	研究例会参加費
広告料			0	
学会刊行物売上			0	
著者負担金			0	
受取補助金			0	
一般寄付金			0	
特別寄付金			0	
雑収入	10	500	▲ 490	
★本部からの繰入金収入	100,000	100,000	0	活動助成金
事業活動収入計	460,010	1,060,500	▲ 600,490	
2. 事業活動支出				
①事業費支出	683,000	1,368,000	▲ 685,000	
大会会場使用料			0	
大会消耗品			0	
大会印刷費			0	
大会通信運搬費			0	
大会臨時雇賃金			0	
講演会等会場使用料	50,000	250,000	▲ 200,000	研究例会
講演会等講師謝金	100,000	250,000	▲ 150,000	研究例会
講演会等消耗品	180,000	300,000	▲ 120,000	研究例会
講演会等通信運搬費	20,000	20,000	0	
講演会等臨時雇賃金			0	
学会誌印刷費	100,000	100,000	0	部会誌
学会誌通信費	25,000	25,000	0	
編集委員会費			0	
研究発表要旨集関連費用			0	
研究補助費			0	
表彰費	23,000	23,000	0	ものづくりフェア関連費用
関連学会費	10,000	10,000	0	協賛金
給料手当			0	
広報費	35,000	35,000	0	HP契約・維持費
福利厚生費			0	
旅費交通費	50,000	200,000	▲ 150,000	
通信運搬費	20,000	15,000	5,000	
備品費			0	
消耗品費	5,000	10,000	▲ 5,000	
光熱水料費			0	
雑費	5,000	20,000	▲ 15,000	
総会費			0	
事務委託費			0	
租税公課			0	
地代			0	
会議費	50,000	100,000	▲ 50,000	研究例会
支払負担金	5,000	5,000	0	振込料
印刷費	5,000	5,000	0	
諸謝金			0	
修繕費			0	
減価償却費			0	
リース料			0	
事務所管理費			0	
②管理費支出			0	
事業活動支出計	683,000	1,368,000	▲ 685,000	
事業活動収支差額	▲ 222,990	▲ 307,500	84,510	
II 投資活動収支の部				
1. 投資活動収入			0	
2. 投資活動支出			0	
投資活動収支差額	0	0	0	
III 財務活動収支の部				
1. 財務活動収入			0	
2. 財務活動支出			0	
財務活動収支差額	0	0	0	
当期収支差額	▲ 222,990	▲ 307,500	84,510	
前期繰越収支差額	1,180,802	1,264,598	▲ 83,796	
次期繰越収支差額	957,812	957,098	714	

# お 知 ら せ

## 1. 部会費について

平成 30 年度の被服構成学部会費（正会員：4000 円，学生会員：2500 円）は、5 月中に下記郵便払込み口座にご送金くださるようお願い申し上げます。また、過年度未納の方には別紙にてお知らせいたしましたので、併せてご送金ください。

郵便払い込み口座 00160-2-322300 日本家政学会被服構成学部会

なお、会費に関するお問い合わせは、下記にお願いいたします。

〒173-8602 東京都板橋区加賀1-18-1  
東京家政大学 服飾美術学科 大塚有里 宛  
TEL・FAX：03-3961-8394  
E-mail：otsuka@tokyo-kasei.ac.jp

## 2. 入退会、住所変更等について

お届け、お問合せは、下記にお願いいたします。

〒173-8602 東京都板橋区加賀1-18-1  
東京家政大学 服飾美術学科 田中早苗 宛  
TEL・FAX：03-3961-9002  
E-mail：stanaka@tokyo-kasei.ac.jp

※ 入会申込書および変更届、退会届の書式は最終ページをご参照下さい。

※ なお、退会届につきましては（一社）日本家政学会の退会手続きとは別処理になっていますので、部会への手続きも併せてしていただきますようお願いいたします。

## 3. E-mail アドレスについて

E-mail アドレスの登録にご協力いただきありがとうございます。アドレスをお持ちの方でまだ登録いただいていない方は、平成30年度会費納入の際に振り込み用紙の通信欄にご記入いただければ幸いです。またアドレスの変更がある場合には、なるべくすみやかにお知らせくださいますようお願い申し上げます。

## ご案内

### 平成 30 年度 夏期セミナー（被服構成学部会創立 40 周年記念） 予告

テーマ：ファッションビジネス戦略における身体サイズと衣料サイズの最新動向

会場：文化学園大学（東京都渋谷区代々木 3-22-1）

日程：平成 30 年 8 月 28 日（火）13:00 ～ 講演・懇親会  
29 日（水）10:00 ～ 講演

※詳細が決まり次第ホームページでお知らせいたします。

## 一般社団法人日本家政学会被服構成学部会規約

第1条（名 称）本会は、一般社団法人日本家政学会被服構成学部会と称する。

第2条（目 的）本会は、会員相互の研究に関する連絡及び協力をはかり、被服構成学に関する教育・研究を促進することを目的とする。

第3条（事 業）本会は、前述の目的を達成するため次の事業を行う。

- 1 総会を開催する。
- 2 被服構成学に関する研究・討議・講演などを行う。
- 3 部会誌を発行する。
- 4 その他の必要な事業を行う。

第4条（会 員）本会の会員は、次のとおりとする。

- 1 正会員 被服構成学及びこれに関係する分野を研究する一般社団法人日本家政学会会員で、本会の目的に賛同して入会した個人。
- 2 学生会員 本会の目的に賛同して入会した学生。
- 3 名誉会員 元部会長、または、特に本会の発展に寄与した会員で、70歳を越えた場合に、運営委員会の議決をもって推薦された者。

第5条（会 費）会員は年会費を納入する。

- 1 年会費は次のとおりとする。  
正会員 4,000円  
学生会員 2,500円
- 2 名誉会員は会費を納めることを要しない。

第6条（入 会）本会に入会を希望する者は、所定の入会申込書を部会長に提出し、運営委員会の承認を得るものとする。

第7条（退 会）会員が退会しようとするときは、その旨を部会長に届け出るものとする。この場合、既納の会費は返却しない。また、継続して2年間会費を滞納した場合は、原則として退会したものとみなす。

第8条（役 員）本会に次の役員をおく。

- 部会長 1名
- 副部会長 2名
- 運営委員 若干名
- 監 事 2名

第9条（役員を選任）役員を選任は、次のとおりとする。

- 1 部会長及び監事は、運営委員会がこれを推薦して、総会委員会がこれを推薦して、総会

で選任する。部会長の選任および解任は、理事会の承認を受けるものとする。

2 副部会長及び運営委員は、部会長がこれを推薦し、会員に報告する。

#### 第10条（役員任期）

1 役員任期は2年とし、再任を妨げない。

2 役員再任については、申し合わせを別に定める。

#### 第11条（役員職務） 役員職務は次のとおりとする。

1 部会長は本会を代表して会務を統轄し、事業計画および予算、事業報告および決算を毎事業年度、理事会に報告する。

2 副部会長は部会長を補佐し、必要な場合には部会長の職務を代行する。

3 運営委員会は本会の業務を運営する。

4 監事は本会の会計監査を行う。

#### 第12条（役員解任） 役員が次の各号の一に該当するときは、解任を運営委員会で動議し、総会で決議する。

1 心身の故障のため職務の執行に堪えないと認められるとき。

2 職務上の義務の違反、その他役員たるにふさわしくない行為があると認められたとき。

#### 第13条（会計） 本会の会計は次のとおりとする。

1 経費は会費、その他をもってまかなう。

2 会計年度は、毎年4月1日に始まり、翌年3月末日に終了する。

#### 第14条（規約改廃） 本規約の改廃は総会において承認を受け、理事会に報告する。

以上

#### 附 則

1 施行に関する内規は別に定めることができる。

2 この会則の施行は昭和54年10月8日からとする。

3 この会則の一部改正の施行は昭和59年8月3日からとする。

4 この会則の一部改正の施行は昭和63年8月1日からとする。

5 社団法人日本家政学会部会規定に基づき、平成15年8月27日から被服構成学部会会則を廃止し、社団法人日本家政学会被服構成学部会規約とする。

6 この規約の施行は平成15年8月27日からとする。

7 社団法人日本家政学会部会規定に基づき、平成18年8月22日から被服構成学部会規約を廃止し、社団法人日本家政学会被服構成学部会会則とする。

8 この会則の施行は平成18年8月22日からとする。

9 社団法人日本家政学会部会運営規程および部会運営規程細則に基づき、平成22年5月29日から被服構成学部会会則を廃止し、社団法人日本家政学会被服構成学部会規約とする。

10 この規約の一部改正の施行は平成22年5月29日からとする。

11 この規約の一部改正の施行は平成24年5月12日からとする。

12 この規約の一部改正の施行は平成28年3月14日からとする。

13 この規約の一部改正の施行は平成28年5月28日からとする。

## 一般社団法人日本家政学会被服構成学部会申し合わせ

- 1 運営委員会 運営委員会は、部会長、副部会長、運営委員、監事で構成し、その中に庶務、会計、企画、広報、編集担当をおく。
- 2 役員の任期 (1) 規約第9条に従って部会長の任期は2年とし、再任を妨げない。ただし、継続して3期はつとめられない。  
(2) 運営委員の任期はできるだけ2期4年間とし、その交代は半数ずつ交互に行うことが望ましい。期間をあけての再任は、これを妨げない。
- 3 運営委員の選任 運営委員の選任にあたっては、できるだけ部会員が在住する広範な地区から選ぶように配慮する。
- 4 事務局幹事 (1) 必要に応じて事務局幹事をおくことができる。  
(2) 事務局幹事は若干名とし、部会長がこれを指名する。  
(3) 事務局幹事は役員会に同席することができるが、議決権は持たない。
- 5 事務局 事務局は、原則として部会長のもとにおく。
- 6 申し合わせの改廃 運営委員会の議を経て、総会で承認し、理事会に報告する。

### 附則

- 1 この申し合わせは、平成15年8月27日から施行する。
- 2 この申し合わせの一部改正施行は、平成18年8月22日からとする。
- 3 この申し合わせの一部改正施行は、平成24年5月12日からとする。



## 平成 28・29 年度役員

部会長	大塚 美智子	日本女子大学
副部会長	鈴木 明子	広島大学
	川端 博子	埼玉大学
運営委員		
(庶務)	中村 邦子	大妻女子大学 短期大学部
	小山 京子	美作大学
	森下 あおい	滋賀県立大学
(会計)	田中 早苗	東京家政大学
	渡部 旬子	文化学園大学 短期大学部
	葛西 美樹	東北女子大学
(企画)	原田 妙子	名古屋女子大学 短期大学部
	渡邊 敬子	京都女子大学
	滝澤 愛	椙山女学園大学
(広報)	丸田 直美	共立女子大学
	伊藤 海織	金城学院大学
(編集)	十一 玲子	神戸女子大学
	村上 かおり	広島大学
	角田 千枝	相模女子大学
(監事)	鳴海 多恵子	東京学芸大学
	森 由紀	甲南女子大学

事務局 〒112-8681 東京都文京区目白台 2-8-1  
 日本女子大学 家政学部 被服学科  
 TEL & FAX : 03-5981-3486  
 E-mail : mohtsuka@fc.jwu.ac.jp

## 平成 30・31 年度役員

部会長	川端 博子	埼玉大学
副部会長	渡部 旬子	文化学園大学 短期大学部
	森下 あおい	滋賀県立大学
運営委員		
(庶務)	田中 早苗	東京家政大学
	石垣 理子	昭和女子大学
	土肥 麻佐子	文教大学
(会計)	大塚 有里	東京家政大学
	井口 彰子	文化学園大学 短期大学部
(企画)	薩本 弥生	横浜国立大学
	原田 妙子	名古屋女子大学 短期大学部
	渡邊 敬子	京都女子大学
(広報)	伊藤 海織	金城学院大学
	工藤 寧子	東北女子大学
(編集)	小田 久美子	名古屋女子大学 短期大学部
	角田 千枝	相模女子大学
	末弘 由佳理	武庫川女子大学
(監事)	森 由紀	甲南女子大学
	大塚 美智子	日本女子大学

事務局 〒338-8570 さいたま市桜区下大久保 255  
 埼玉大学 教育学部生活創造専修 家庭科  
 TEL : 048-858-8-9151  
 E-mail : kawabata@mail.saitama-u-ac.jp

(一社)日本家政学会 被服構成学部入会申込書および変更届, 退会届

入会 変更 退会 (いずれかを○で囲む)	申込年月日 年 月 日		受付年月日 年 月 日	
	ローマ字			
	氏名	氏	名	
	西暦	年生	性別	男・女 (どちらかを○で囲む)
家政学会所属支部				
自宅住所	〒(      -      )			
	TEL		FAX	
	E-mail			
勤務先・職名 および所在地	勤務先		職名	
	〒(      -      )			
	TEL		FAX	
	E-mail			
専門分野	<研究分野> <担当授業科目>			
最終学歴				
学位				
部会誌送付先	自宅・勤務先 (どちらかを○で囲む)			

太線枠内は必ず記入してください。細線枠内は差支えない範囲でお書きください。

退会の場合は、今後、連絡する必要がある場合に備えて、連絡がつく自宅か勤務先の情報をご記入ください。

お届けは「お知らせ」ページの宛先まで、添付メールまたは郵送にてご提出下さい。

部会費は「お知らせ」ページの口座にご送金ください。

\* 個人情報保護には十分に注意をいたします。

なお、書式を被服構成学部のホームページからダウンロードしてお使いいただくこともできます。

URL: <http://h-kohsei.com>

#### 編集後記

今年度のセミナーでは、オリンピック・パラリンピックやICTなどの一歩先を見据えた課題について、被服構成学以外の関連分野も含め勉強させていただきました。これらの大変興味深いご講演内容や、諸先生方の多岐に渡るご研究内容を本稿に掲載できましたのも、快くご執筆および編集にご協力下さいました先生方のお蔭と心より感謝しております。来期も編集委員として携わらせていただくこととなりましたので、引き続きお力添えのほど何卒よろしく願いいたします。

(角田)

お忙しい中、執筆・編集にご協力いただきました先生方に感謝申し上げます。今年度も編集作業に携わることができ、先生方のご功績、また被服教育に対する熱い情熱など、本当に多くのことを学ばせていただきました。今後も、自分自身の糧となるよう日々精進してまいりたいと思っています。また、部会誌が皆様方のお役に立てるように願っております。今後とも、ご協力のほどよろしくお願い致します。

(十一)

平成30年3月31日発行

発行：(一社)日本家政学会 被服構成学部会

印刷：株式会社アディス

TEL：078-265-6336